ルル 追加 HO D

「よくやったよ、ルル」

そう、私を褒める声は、父のものだった。 真っ白な空間に、私と両親が立っている。

「本当に?」

「ああ。ちゃんと選んで、決めたじゃないか。それでこそ薬屋リーファの薬師だ」

「すごいわ、ルル。フォルくんが元気になって、本当によかった… …」

母が涙ぐんでいる。

フォルは生まれたときから体が弱いため、父の診察を受けてきた。そして、そんなフォルを母はずっと心配していたのだ。

ほほえむふたりの顔を見て、私はようやく、安堵できる気がした。 両親へ駆け寄ろうとした瞬間、彼らは白い霧に包まれていく。

「待って……!|

声も、姿も遠ざかっていく中、私は――目を覚ました。

見渡せばそこは見慣れた診察室で、自分はベッドにいるのだと遅れて気がつく。

今のは、夢……?

そうだとしたら、なんて、なんて子どもじみた夢なのだろう。

自分の選択を信じたいから、安心させたいから、そんな意識が見せた夢。

私は、初めて万能薬を使う選択をした。

そして、それを誰かに……ツバメに、話した。

あれほど気を張っていたのに、だからこそ家についた途端、糸が切れたように崩れたのだろう。

体に痛みはなかった。

地面に倒れる前に、ツバメが抱き留め、ここへ運んできてくれたのだろう。

……その彼は、今どこに?

見渡しても、診察室には誰もいない。

私はベッドを降りて、ツバメを探しに部屋を出た。